優國詠草

一

特別
イ 4
3163
41(1)

貴
イ4
3163
41(1)

柿園詠艸

春の歌の中より

鶯の今朝鳴くこゑ谷川の氷にとけて霞の袖に響きぬ

初瀬女のこもをむすびて霧たつる山路に柳こぼれ初

閑居菫

垂ちぬ花ぬ咲て菫艸ゆゑ胡蝶の袖をとゞめ来ん

人まつ庭に花もちらで春のゝ毛氏なくれて咲

春風

雪とのみ降ぬ桜ちるあらんとすれ吹て春風を吹

雉

新玉のあくあさちの原なれば雉鳴やはてはなれ来ん

海邊霞

沖のなてらすみなくれかれ松かえにかゝる春の色と見えけるまゝ

待郭公

杜宇こゝにも咲藤の花むらさきの雲の袖ひくなるや李

まつよひと心あてにまつ待あへぬうちに初音きかぬ歟梨

草花

春日野やわかなもまたしらぬ花たにまたも名の露おく花の萩ならなくに

遠近にたなひく河霧を

かし浦川鳥羽山のたて立雲に舟待つ人の見えすや朝霧の空

浦月

浪ふかきかこの浦の秋の月影さくらの波にあさけらす

名所紅葉

わけあらむ梢木の中にもみち葉のちりて見るも足にかゝる錦の山

落葉

ふして風のおとさへ一葉もとものけふのまきさそふれなるも

冬朝

霜とけぬ庭の芝生の茅生も打しめりやみてしめく日のかけほと

水鳥

葦蘆のうちもりあるにも宿る水にも契りのあるそ池のをしとりも

年毎にたえぬ女のおもかけのみえてあそふらん

きのふを長月のつゝましくてぬれ物からつつて

かしこのふとにも何かれとかむかへるをそこにてあて

やよひの葉の花を折てここて出しふるとおかしさ給を

有とある霜とまりし茅の花ともに給ひもあれはあるへきか

四月末つかたや遠江を立出て伊勢国松坂のつゝき

川俣越といふ山路を経て木曽へ通ずるなり

奇の中に

ゆくあるこの花の枝を八ツ山ぢ本ごのみとうかゝ毎ごこうゝ八枝

東路のゝ道ゝ松ゝ旅のゝ人ゝ

あふこゝ蕾のゝ有ぢ来ゝ花山路をぢ中きゝ

あゝ日を三日数ゝて七日の市に出ゝ

文政九年のゝ夏ゝ

ゝ人ゝ

ゝの路ゝ出ゝ里の犬ぢ来拝ゝ絶ぢ

旅衣ゝ花ゝ

ゝ日ゝ

鈴鹿山越ゝ花ゝ

伊勢路ゝ

ゝ山ゝ

ゝ

ゝ

遠江国ゝ時石川依平ゝ

嵐ゝ名ゝ六月ゝ

ゝ月ゝ

依平ゝ頃佐夜中山ゝ

ゝ

谷の葉峯ぢ

宣家ゝ

ゝ

伊勢物語をよみて

野へとおもふ心もうつもれて雪をこそあれ小野の山さと

源三位頼政

風やとるこゝろ乱れて野篤矢をはなて射つゝんとすれ雪をこそ見

世まわりもとつゝまわる年ぞ

蓋荒男こうちもうさぬ山のそとせ何をこそ来つゝん

あつを出つゝかおもふことをこそ

うくれなゐとなるむこのうるいかをそれさへ家のあ稀ある世

本は文箱の霊祭り寄萩懐舊とふ題をて人々と

かゝるゝ

わの身をこそもうつれ萩の花もとに垣根をやつれてそきく

獨述懐

ものあらしやかくあらしやとわの思ふ心を誰ときゝこの庭のあむ

懐舊

おもふ人おきのおのくれ年を経て今ゝるめるに神や何ぞ

寄樹懐舊

あちこちの山の人の契よむ〜ゝまわ〜ゝとおもへと神のそなる

家を云ちめ〜ゝ立ゝの題をて年ゝとあるふ中ゝ

淡路島の沖ゝをめ〜り木の海ゝ沖ゝを神代のそや立ら年

うはせゝ世ゝあ〜たまるものゝ〜ゝを立ゝ山ゝをうゝ

松をおゝら梅の初ゝ山ゝ世の盛ゝまゝ力〜ゝ

鶯の山ゝ〜ゝをめて立つやゝゝまゝゝやゝゝ力やめ〜

今切懐古

高師山松ゝ昔の義家の義演名ゝ樹ゝ〜ゝ山みそ矢入める

海邊立春

[illegible]

閑居早春

[illegible]

[illegible]

自馬部云

[illegible]

野菜

[illegible]

都若菜

朝風[illegible]

鶯

[illegible]

社頭梅風

[illegible]

窓前梅

文机の[illegible]

華墻君の[illegible]園[illegible]芳野[illegible]西の菴の[illegible]

庵あり[illegible]二月[illegible]

不[illegible]雪[illegible]の道をとめくれ[illegible]

緑萼梅

[illegible]

田家柳

うち出てあゝ田ゑゝうゑ門の青柳もえそめにけり

殘雪

梅の香をかゝへる風のつゝみ雪のしゝ山下くつまをゆ

木末雪

こ山木のうゑを野の艸も亀めくをいつまておつる雪れ雪枝

餘寒

ひとしれてゆかうつゝ失れもとゝ枝ことひうゝれる雪とそ思ふ

夜餘寒

はるゝ雪くちゆる袖のふ梅の香もあやゝ見れ雪床ふれて

水郷霞

もゝしつむ淀野をゝゝて川あの色ゝ見うゝる霞の那

野若艸

雨そゝゝ雪の野ゝれ艸ゝ落ゝれる霞も野門ゝ見かれ

春の寄せ中

ゝゝさゝん者垣ゝのうゝきとうつゝて世ゝ外の人を社ま雨

春雨

ゝゝゝそふ新堤の柳ゝ紫ゝあやゝ花ゝつゝ雨の青ゝ柳

田家春雨

屋ゝ入る人ゝ見ゝ霞ゝ雨人ゝて外ゝくゝゝゝやの角ゝ垣

楽ゝゝゝ見ゝゝ墨の子ゝ入ゝゝゝ除外くまゝの角

春月

咲つゝくゝ見ゝ花や暮ゝゝゝ月ゝゝ契ゝ

ゝ月ゝゝ牡鹿ゝゝ雲ゝ見ゝ勝月ゝゝゝゝゝゝゝゆく

江上春月

うへの鷹ゆくかすみにて大くらに入江に交りしの秋去月

野春月

あふとうの小舟の原に沫雪おわろ月秋のあひこゆ

山春月

ゆきさん岳をうしめて山端は新雪つゝ紀月をうつ春に

河邊春月

三月まつ河をしも木陰より酔ひ人ある法華を人ふかう

春月

二月のはるかちに月秋ひとくもうもをそ秋ゝ

久まあめり草咲野のうに月秋を雁の拝を中空ゝ雨

二月のゆまに出のうにくるや月つゝ秋こうひ人ゝ雨

春雨田家春月

新人ゝ遊やはるから水田うを新緑をうにて月うゝすめ

春雨

もえそめ一垣のふゝ艸葉を立ゝ不ゝ雨れと雨の晴雨

まちをゝ吉野やはつゝ春雨ゝ雨ゝ書ゝふ窓ハゝ秋咲ゝけ紀

草も木も岳咲ゝろ紀雨つゝ春ゝ山ゝぬらはわつゝろう秋

玉桂市秋ゝや落ぬらん巨勢の雨紀雨市々雨

雨ゝれぬ桂ゝも紀ゝはるつゝ秋のもゝきゝおゝろうまつて

田家春雨

ゆゝ孫まゝ前代小同ゝ隆雨紀法ゝ市世をあつく春ふ

雨雁

霧たつむ垣内の小田を立鳫の翅さうぶかしき九月[illegible]

[illegible]

[illegible]

行鳫の[illegible]

帰鳫知春

立鳫の群はまさしき[illegible]

湖上帰雁

近江海湊八十あり何しかもおもひとまりて鳫のゆくらん

関路帰鳫

寒こえて鳫そゆくれる山のせにあらしは梯はまだぬを

餘寒

鞍馬山ふかめいりてしらえうのかとは笑を風雪さそふれう

雁去燕来

二月のそらあきこうふかくふかをさとりくの世のゆそう

燕

つと斜くくゆさへうえて移宿をとふの燕乃契をとう屋傳

立出こそのつとめれ方のまこそやのそくれそうつはやさふ

河上霧

角田川春ゆもゆ出ゆ[illegible]めて霧うくれ旅寝てしか

山霞

花やゆつちとつくれ中[illegible]こそ[illegible]て色そる[illegible]みの山

海邊霞

年夜門よりて[illegible]出てひまはうつ潮の裏く[illegible]ぬ

春山

このもとの芝やちるらんそれもまた紫や咲らんをつく波寄山

長望

松嶋やあくるとやはれ朝霧浪あらそぬ色の小海可那

木川長望

胡蝶とふ堤の艸もめもとをれて霧をくるしたる筏う能

長日望山

ゆるまれをしのとやもまつ山の横ゝうれの志乃めの寄

正月をしめつる為菓つまとて人ゝとゝ元ゝ聖辺て

出ゝあるの人のもとゝ立ゝ乃ふきをしふある松ゝてと

しゝのはゝて出ゝ乃る

色ゝ人る野辺のわゝ菜をもるゝ(て)松のみゝもとあさつるかふ

野亭雲雀

雲雀ゝ胡蝶の美ゝはあるゝ朝野の菫ゝ乃あるゝ

野遊

ゝゝの庵をゝもて出ゝうゝれもゝつゝゝ野辺ゝ芝ゝ咲ぬと

菫

雲雀ゝ胡蝶の美ゝはあるゝ朝野の菫ゝ乃あるゝ

厳

ゝゝ立ゝわゝひゝと天ゝゝ山本ゝ乃ゝ形ゝ志を誰ゝ乃人安

ゝゝのゝをゝさゝゝわゝてゝゝれの霧の動ゝふゝ(ゝ)ゝ乃梨

難波ゝ乃ゝて又のゝ世ゝ佐ゝ木春夫ゝもゝ

芝ゝゝゝつゝんゝゝゝゝゝゝ人のあゝゝゝゝゝゝゝれて

花

花をゝ美てゝのふゝ天ゝゝ芝ゝゝゝゝゝゝゝ

落花

うをゝ誘ふけものゝ野の末柴をりけてうゝ[illegible]

朝花

撫さく[illegible]やうゝ人の羨の[illegible]

山端をいつる[illegible]

夕花

咲[illegible]

夜花

あ[illegible]

花下言志

つ[illegible]

根[illegible]

よ[illegible]

山路花

[illegible]

山家花

[illegible]

人[illegible]

花窟のうゝ

咲[illegible]

華墻君曉[illegible]

[illegible]

憐霞樓の新室寿[illegible]

二月[illegible]

[illegible]

ゆきかく八十氏つかねをうちそへて冬ごもりする殿ばらの面

依花待人

鶯のこゑを梢にきくにつけて[illegible]

根来寺法花堂のうしろ山にて

峯つたひこゑをうつしてあくるはうらん山の谷うぐいすのなく

安藤[illegible]のところの梅谷にて

咲ぬれば梢をつたふ川風にこぼれて空にうもるすがこゑ

故郷落花

[illegible]

行路落花

[illegible]

[illegible]

吉野にて[illegible]

[illegible]山寺の峠も越てこえ[illegible]

あくるて六田の淀にさし棹の音[illegible]

立明のうらゝ[illegible]朝霧[illegible]

舟長[illegible]今を盛と棹さして[illegible]

廿一日曉ふかくおきいでて吉水院の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の山ぶきもさかりにて[illegible]
吉野山をうらはふくてやとうそぶきてあるに新花乃新
みよし野をたづねてまゐるに[illegible]
おもとうたてさいたりしんもりの来れるをうれしがりかの
うゑしとまゐふ長月朝うゑを芳野の宮にてうたる
天の香ぐやまの日ぐらしたのもしきなりなると
中くも宮ゐるあ[illegible]中道を咲らるこのよりはうゑんむ
[illegible]の竹の林を一本千本ぶきまゐりめ[illegible]

芳野懐古

三代を経[illegible]やこのさくら何[illegible]ちぶれ[illegible]の[illegible]を
鳳[illegible]もわ[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の秋[illegible]を吉野山[illegible]

三吉野のうれ[illegible]を踏て苔の山[illegible]ぶきを[illegible]
みよしのをあるある山と[illegible]
咲ぶきあるあ[illegible]
[illegible]
翅[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

如意輪寺のとををうたて
くらぶるやの梅[illegible]

西行養ぶて

[illegible]

鶯のこゑもつるこゑ山ざくらふくくるむもとに藤ぶとうをら春
あ一ぱきくら野の奥こつ野の陣一ぬの弱れむ一絶なる
ら一ぬ山ここかこまてくる岳藤ここへて人の
もとへ

山賤こくるう野の岳こうこまれくむ一紙ぬつそし

朝霧花

野髪のこうれこうくふ櫻こ野ぬ岳の岳何むこうぬ岳

池蛙

ゆこくこう堤いこ元一池のうぬのう紙こ面繋ても鳴蛙こう野

夕蛙

さここ人今ぬこうへる島ぬ田野夕こうるよや蛙面ぬ弱ん
う野ぬうかへるこうる梅にこやこうて

みう野ぬ滝の野こうぬ野て蛙こく歌ぬうぬて蛙こも野一

蝶

くれぬ面ぬく岳の旅泊ぬめこ袋ぬこ紀ぬこ一蝶のこしこふ

中村真貫の江戸へう繋岳ぬ紀ぬこ一蝶のこしこふ
蝶こふぬ題ぬ岳て

こ震ぬここ面こ朝こ野こぬこここふの紙こ梅こて

ゆこ子鳥

岳山のこうぬこの奥野こふこ面ぬ黄野岳こひぬこ紙く

岡鄭躅

ここりここふ松こ夕日野こうぬこ野ぬこ一こ紙岳やここ西ここ一

遊子花

汀こ野ぬこ面ここ面ぬ垣野ここ面ぬこ紙ぬこ紙ぬこ

山振

芳野川岸の山吹うつろひて花の雪をぬきて散く波の
棹姿もて筏を一瀬ゐるなるべし新緑もえく山路のうち

松上藤

うつくしき花の雪のくもあるかうる宮の松ぞ藤の花咲

後の雪ぬくを見れば松の枝の賜ふをやもとめ(うるわ)

湖上藤

多の姫の藤浪さかりなる今ぞ八霞の独見るてまて

春川

木川や小田の大堰の表ぞ水ぞ流るるかさまの引ら

春竹

下ぬ竹ぞ竹ぞ秋を鶯ぞ若葉あはうつまし

春鳥

ふるさとの人ぞ山縣の朝菜ぞ流れ流るる

暮春

散てん後のるみと花のあをぞ紅もあはやうれ

山暮春

うつせ安の流るるを岸のうるるの春の

閑居花

大うるい春も人めぞうまもて咲てゐる山科九〻一の那

首夏雨

夕ぞうてこぬめこ流るるもうぞ牧の沼ぞ拝て夏ぞる式

更衣

衣ぞうるつのうるまを毛海のあるうるうるそれを

惜更衣

かへすがへすも何をしるべの花の枝

球花

夜の雨に垣間見る花の色

山寺球寫

里遠き片山寺の花老をやしなふ雨の花

新樹

はるばるの花の木立も松杉のうしろやうるはしき夜の

新樹妨月

花散しし山さくらの戸をみれば月のまひさしくぬれぬ

卯花

うの花の露はらはるる咲ぶりの袖の白玉ぬれぬ

うの花の咲るやうにふるあれども出つる郭やみの行ぬ里

卯月八日祭

あ[illegible]巻の毎月の川そひの卯花垣は誰の志ぞ

神祭

[illegible]の花の[illegible]の[illegible]の花垣の朝風そふく

郭公

雨ぬぎ月ぬぎ[illegible]郭公[illegible]の[illegible]年

大[illegible]の花つ[illegible]暁ま[illegible]の山ぬ[illegible]

片[illegible]あ[illegible]る夕[illegible]

[illegible]の名[illegible]一拝[illegible]

待郭公

[illegible]夕[illegible]

浦郭公

[illegible]藤江の浦より夕潮の満てとろく程こぎすぎ

與女待郭公

[illegible]

西中早苗

[illegible]小田植舟の[illegible]早苗さしやる[illegible]

五月雨[illegible]

人わすれて

波路[illegible]沖の夕日の[illegible]て淺田をく早苗とる[illegible]

菖蒲

雲井まで[illegible]根さしのあやめ艸[illegible]

[illegible]

人の[illegible]端午の祝[illegible]太刀より菖蒲をつるすこと

[illegible]

夏狩

[illegible]小野の[illegible]

外月[illegible]在田郡[illegible]

[illegible]

樗雅家

[illegible]

[illegible]

旅五月雨　道成寺[illegible]

旅人のふく[illegible]を絶て日[illegible]

五月雨久

[illegible]

紫陽花

夕月夜ほのみえそめしあちさゐの花もさかりに小咲きにけり

あしこ花のみされをこそ所雨のうちにもさくまつあちさゐの花

水雞

植えし田面の早苗うちなびききのふしらぬくひなの聲すなり

水雞聞くふることそ老いは氣を門の方へさし昔おもえて

夏月

夕されは月の影くれの空をはるかへおとろく花の声の方

なき侍しに

露その身を宿へ垣に移てしあをの宿くいそくして咲

庭艸にかくまし水をまねく葉の夜なるしもの花

夏葉

かくもおきしおく露も消ゆる日に千代をかさねもちて葉は咲くなり

夏花

里ちかき花井に志つか風にえてあさくゆふすゝむ袖にへかかゆ

日をかさぬ堤の艸は色も移しき花かなとおもひ盛りの花

いてや刀自てる日をお日へ向てしなひつゝ河つゝ咲る花根

夏草

吹上の小野の夏艸志げりとてうちなびきつゝ葉もなしまさる

螢

安かさる夕川風に雨晴て影ひつくしくほたるとぶなり

うちまねく扇の陰もあつき夜をよるなつれて飛ぶ螢かな

こゆらし田の麦わかつ穂あらわによるさへ見えて螢とぶなり

田所頭周のもとにて夜螢を詠める　建仁熊野御幸記より

[illegible]川あをすゐ淵や[illegible]つめん[illegible]芝生[illegible]ふなり
岡辺川[illegible]宮[illegible]あきし義革や朽てなりけ[illegible]

江樓流螢

吹[illegible]夕川風[illegible]

窓前螢

[illegible]火[illegible]

照射

弓弦[illegible]人[illegible]

水雞

敷遣火[illegible]革[illegible]屋[illegible]

氷室

[illegible]

岩代の松をゝ[illegible]

鶏川

[illegible]

水上螢

[illegible]

雨後夏月

[illegible]

海上夕立

[illegible]

扇

[illegible]

新竹

[illegible]

梅の実ぞ色づきてうつる園のまつ所ぞ清くもあるこの邪

泉避暑

蝉のなく井の色深き樹のもと深くしたる独り秋風そよぐ

海邊納涼

海人のすり釣のいとふく夕風の涼しや秋もしるしなる頃

夏暁

なつのまこと乃水うきて入てきつる山鳥仙とやさくらかるる花

夏船

常世もの岩立ちもれ近風よあてのの湊を朝ぬきる船出

夏動物

杜鵑行夜更ぬく半ばの山ろ鼓のうて聲ぞ名ぬのうく

夏遠望

東海の夏さへ寒し夕立もまるるまもなくまつ雨ぞ

六月稜

ここぞ知る稜の波秋の来て清き川原ぞ夕風そよぐ

百合

垣もとふ柱しらぬ六月のてる日にあこて笑ぞ咲

立秋

霧晴れもしぬふの秋ぞ秋の色をるく

初秋萩

うつろひぬく萩のさ枝ぞ秋の雲こぼれ秋立ぬ

七夕

天の川うつる木ぞ乗ぞ織姫の笑て業代絶ぬ

萩

風をうけて波をうつもしほの音荻の露ふるみぬすて

海邊荻

月ときく海人の釣舟聲更て秋風高し伊勢の浦荻

荻風聲夢

ひとり更て夢覚ぬ枕もとにもなれぬ秋の音〳〵荻ぬけ上風

河邊艸花

そゝぎ出る清流うちそゝぐ九月の岸の月草色咲ぬる

荻

さゝぬ岸杖のおもひの折くまあるとなれと露みゝれて

風もきふさ枝の露ゝそゝいまてまちやうゝ秋こゝのそふ

月ゝ人の袖ゝ〳〵〳〵荻ゝ色はめく色ぬ時もすそ〳〵ぬ

野外荻

あるゝ海人をとゝあらゝかゝ斜ゝ須磨の浦ぬ秋荻の花

荻映水

あふぎぬ野中ぬ水ぬ新月ぬて者ゝ枝の上荻今盛なり

八月十五日憐霞樓ぬて

月をぬ秋ぬ折ゝて荻ゝ色ゝ月ぬ露ゝうぬて水ゝ面て

川ぬ流ぬ生荻の水ゝ紅色ゝ入て省ぬ者ゝ波乃秋の色

緑亀君ぬ折ゝ者屋ぬ荻の宴ぬて

生荻原むらゝ晴て鈴ゝ虫のなく者ゝゆゝゝ者ぬ白露

雨晴〳〵ぬ紅の荻ぬ露のゝ上ゝ者ゝ月ぬ秋の彩

故郷荻

秋ぬて故ゝ者ゝく野ゝ月ぬて荻毎むゝ〳〵ぬ秋なゝ者ゝ

七月ゝ者ゝ人のもとをゝふゝして豊ゝ荻の色をゝ

出てくるをやもゝ鶯なきやまぬ笑ひてくるおほえ
てゝあくまてゝ
鶯を小山をやゝ出てうんとうひとしたの芝まくすり

薄

薄原尾花ふるもゝ反銀のまうしの小鹿ふしをそらを

藤袴

ふしをそらをもうしもまを野原ふるを高ふ藤袴こう那

朝顔

雨の高ふまうしの霧ふうろひて色とられゆく朝こうれ云
咲ふうしうつやゆくこう那新の云こ物ふる世をこうしうし
う那ふうこうて物をうれくも八重こうれる朝白云

月

天なるやはうしうしの小野の麦原もんうこそ月をみるこうれ

月前蟲

月やこう萩のまうしうしこうこれを山のこうこをまこうして

湊川より母をこうこうて

夕月夜あの暮ふる川風ふうこう穂て清き雨ふうこう那

旅宿雨

清こうこうふうこう唐清こうしう蓋清雨八重雨高ふあるこうれ

秋夕

おうしうれ真垣の小萩ふ那てふまふるはうれ夕ふうやを
てこうこうしうしあこうしのうこうふ月夕こうれ云うしうし秋ふこう那
雲ふのこうふ鳴こう高ふこうて秋の日はこうふく云を物こう高夕云

海辺秋夕

梅さいてうふかきあさの夕秋風に
加宅秋夕
野辺とのこゝあまをゆくやうに出てそよ何をうしん林の音を
秋風
きこうへぬうらの竹も秋風のうらにおとつれそめ
建仁の熊野御幸記よりとるさま紀伊ようにて
萩原はあらし
うらはもく小野は萩原風こえて鹿の背山に霧こめたり
山霧
おもうへぬ山もうへぬうえて夕霧の深はおもひやるかなも
河霧
初瀬なる神ふる川の音はうらは秀はひく秋朗の邪
小鷹狩
栗津野やもとらふくさ角ふるうてはうをそ四ふ
行こうへやあくるもうあらぬ野の尾崎に落る角ふうの邪
野分
月入をとおもひものを夕をとおもはまこうふ
木萩原さきをいおもよ嵐のもし八月のあ〻山てあけ
野分あつ夕秋風ようの荒れのうら風くみまてそふ
秋燕
月うちもはうこうつよ秋朝うらあをやを出る法はくうめれ
九月そうを山里ようはうとて
夕〻ふ宮彩の木立よもをれて鶯さも鶯の琴教ひうを
浦秋風

志賀の浦波うちよせらるる八月ばかりの秋風ぞ吹く

霧

まがきなる野萩の原に朝霧やうすく引かれて咲くらん

雁

秋とともに四方の海のあなたにぞうかれつるらん

月

袖のうへにあまてらすかと新しく秋より月の光ぞ

憐霞樓賞月

月やとる雲のたもとにかくれてもなほ袖にうつる影の色かな

霧おもる園のうち掃月をけよ三まつ

小車はかりそとふかくめぐりしに秋の月をぞ

波のうへにうつる月のまどをとはうん人やきまれる

秋の月形ありの糸をそおりおりにかかる萩のうへ玉ぬきもかな

八月十四夜和歌四位とともに月の光ぞ

そこ深みあかしの浦の星月夜

夕霧をかかるなかに秋よりあはれなくしもの色うれ

五百代のまき柏波ぞうつ浦波月をうつ秋世のうん

秋月

月をのみおもひ入るかのあくるいはやとも秋やとまるらん

九月十五日清舎君月を見そなら鹿の鳴きこそ

月ばかりそこそこ絵へるまで北山の何

秋のもとにつまもとまりの月ぞ秋の山のもりをう

ちすてうつ琴をもとりいれ入るも秋の山のもりをう

くるる原月光やおもるうん高るこの音を天下一音

八月十一日摘人の寺よりやうへるさて
薄雲のもとに一村ちりとうまくくもまたて月も出ぬ
としくの八月十五夜名浦にて人々の中す
むけ嶋きよ所清きまゝ名所七所代のまゝ月八人なまし
山陽の中に松原わらかゝめれまいのまに乃ゆる月とゆ
おもふところ小舟よをしふとうち浦まこゝいの月や色とう更
秋の月さまんとふ月ハ松のまの清き波のまとうてます
今こそあまも大宮人の舟うをしわうら島山月さへうこゝる
あうれの潮干ハ月こゝところをうをとも月のみちう海
更ようう今ハの心ちさうけよ海雲ハ崇ハ野秋ハ
うまし酸ハ今ハ心さこをハ行みをもうてや月ハうをうたん
むけ清まいこ秋のしりうさうん波かゝく月も更ハ

月のおもハ面をとうて島をうの浪もそをむけ
雨雲ハ秋ハまる月をうひさ海ようう紀波ようう夜ハ
秋ハまあ秋ようそ秋ハまこうの浦ハ松も巖も月ハ別ハや
ようう浦の月ようむうハ秋ようもうふるうを月ハ老ハ
十七夜むけ島山ようの月
一むうう海失ハ松よううけて内かの海の月をみるこれ
漁火ハうをうさえて屑引の浜海の門中月ようう
年ゝ七月十五夜淀川にあそびて
水門川小舟のう棹さうてあまもう月ハうけう艘
ようりうう海失の松ハうう月をハうをる波乃ようう那
月のうう坂をうこれてハうハうをうくくかうこハう
ようう川流くのまう波ハうくうおハまうあう更ハ月長て

月うちたてし松のうちうちにてんやく船よりうたせさせ
あとのうたはまの嵐原月をうつしかねる
まつ風にうち波はたる樽さし捨てたるの井海う月をうつるれ

海上月

沖はるかなる夕みちうつるもえんむれうて波の穂赤し月やいはらん
秋風よりくしい羽うちて浦田の穂のへをこゆる月はまくるみ
船窓の秋のうちもし火のくとまくめる海うち舟はうつへ梨
新波人あり山穂舟よ樽させあみくまて清し波のうへ月

山家月

蔦の葉ちうつ葉ちうつ山里はあるたき月夜雄うつ人をまし

鳴滝は山寺よりうつる暁

あるうくしたり山寺はたくうちたをうつあえくてうたをあうたは月

月前煙

山里ちまつ松葉をうつ月のうつ月うつ三ゆ

月前霞

霞ちうつかくしく月のあやむうたるうまてうつ春はたるうまて

九月十三夜憐霞楼はたる宴ちうつふうして

月ちまくうて月のうへはたるうまて風のうつ松はたるうまて
月ちうつ片山寺はたくうつ雨ちうつ雲ちあらぬ鹿ちのうつ
月ちうつくまうはたの雨ちんをちよ艸ちうつうたるうや霞のおくうき
月ちうくふまの池はたるうつ月ちうつ鯉底の玉藻ちかうやうえんうん
月ちふく市はたる柱木の風ちうつ塵ちはたるうつ晴しそううれ
月ちうくうちはたる堤のつうて縄ちうはたる新ちうつ月
月ちうつ月はたる浪ちのうつうえんくうあ月はたる秋ちうつ

月よりく海人のつり舟のたゆたひ入て釣くるを清〳〵初うのこゑ
月よりく波れもて死も更ふかくあまこうの死病の社ちらうん
月よりく墨れかの心をもをくこうに浪れお愛こう都
月よりく人〳〵てあつめきを〳〵こうれこをしうれ板ふたる門
月よりつ大塚のたくこきもそくきちやく教子雅のをるぬ
月よ孫ぬ人もきをもまり風の更てもとめ教笛弁乃こゑ

九月十三夜半天樓きふこひて

萩の葉れ秋風のわうれ吹こうへて月よりめれる笛の音こう那
よをさしこきこ〳〵よりろれ高殿のをれうきこ〳〵清き月うれ

八月十五夜月ぜくれ

幸憐亭樓にて

新くあるゆをを小宋仙〳〵長月よりかうみをもいを教ふふして

九月十三夜ゆををうのうちと〳〵

もををくくむ尾芦れ社乃霧の月れをうとこゑや

深山月

一むれ杉の梢よ山見えて月のもしく澄乃音可那

月前友

うとからぬ友とや月もおもふんまうれ社よ新をつうれて

八月十六日清廉舎君播磨の何うれ院りて萩の

花の宴〳〵つとふる

あうられく秋の野もれむと垣ふうえぬて萩咲乃中

をうこうく景れおらしやうふん夜を浦の秋を萩の景ちる

芙蓉

秋浦羽のうれくを百弁芙の垂々員れを残うら猪てそみる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八月十四夜

[illegible]

月下客来

[illegible]

[illegible]

搗衣

[illegible]

菜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初霜を今こそおいぬらん葉ぬ八重ぬくゝ逼月更よりも
あしきつれおとろる園の菜ぬ芸ぬ代をうゝ拾てそゝる

河邊菜

初ぬ水を風ぬまゝ世て水上ぬ菜のうをうそ独よしめ浦る

海邊菊

まくら結るあのうしひ菜を植てあまも千年ハ狩ぬ人り
海人の子のくつつまさをる菜ぬ芸ぬ中ぬ世の植よやそ行ら
あぬ白ハ秋こそゆらん一むら松よりおくれさくの中道

紅葉

山深くさのこれこむうはゝ立ぬよりそもをうらぬのハ
秋風ぬあらそひうれて朝をのをうる菜ハ浦ぬきうり人ち
山ゝくぬあらのをぬ色ぬ白ひよりのめくらやもみち求ら菜

立田山うぬ青こもゝ秋の白ぬうふくゝを紅ぬきてくやんむ
ぬ色ぬくぬ色をゝみまハ菜の秋ハ来こそ菜ぬ白ぬ
かゝゝ山又山のもゝら菜ふを旁ようて今ハ人ぬうの形
あくゝ白く山の色をうぬもゝら菜ふを海ぬくてらぬ色ぬうゝれ
切部山ぬ木のこれぬのうぬをみちかゝゝ人ハ色をそゝま
うゝゝあくかさらき山のむゝゝもゝら山の人ぬ菜ハそめくん

多浦まて

色豆のねハをゝゝれて磯山の猜をそゝをむゝゝれうか

紅葉浅深

年まゝゝくゝゝもくゝぬの蔭ぬうをめん妹こめそのをよこうれく

紅葉深

山てゝぬ猜の色をゝふゝれい菜ぬの月ハくゝもあぬ言ぬう

秋雨

もくさむき秋の山ぶし屋のさし籠れてうかりそれ雨こそ降

草蔭の松ちるまをふる秋人こそこられ雨のやどりまに

真萩ちるあしあれ雨とあはうらみ月の末れうきそ

夕附日てらもあへぬうまくもや拾ひ原うしむらさめそふる

雲雾ちるまよふ山の松ゝ本々ふもふくらひ雨こうまし

かりとわくる尾花まよわゝ秋の面ちふる花ゝ袖くゝつ

山路秋行

駒のあく片山ゝ道ゝ笠ゝ雨ふく風のやむをまるか

秋田

六月のあはのうきゝ人えをゝ田居の早植ハ色付まゝ

う面垣のむゝ花毋詠面ゝてやて彩川の田居まをねうゝ

稲刈面

頼金のゝ戸ゝ人ゝてのまゝう面に稲を今ゝこふゝ

山家秋

日くゝ山ゝ雲ゝ色ゝ山ゝ雲ゝ山ゝ雲ゝ山ゝ雲ゝ山ゝ雲ゝ

半天樓ゝ西行養ゝて

月人籠ゝ野ゝ秋ゝ稲ゝ刈ゝ中ゝ秋ゝの奥ゝ秋風ゝ面ゝく

秋日ゝ慶寺　詩題

ふゝゝゝ秋の野ゝ花ゝ色ゝ花ゝ色ゝ花ゝ色ゝ花ゝ色ゝ花ゝ色ゝ

鹿

常盤山ゝ中ゝ色ゝ山ゝ色ゝ山ゝ色ゝ山ゝ色ゝ山ゝ色ゝ

鳴瀧の山ゝ色ゝ山ゝ色ゝ山ゝ色ゝ山ゝ色ゝ山ゝ色ゝ

面ゝ山ゝ風ゝ面ゝ面ゝ面ゝ面ゝ面ゝ面ゝ面ゝ面ゝ面ゝ

[illegible]

山寺あるかなかの山もくれの雲を所あまさをしうれ琴

あの柳の樽もさ枝まれてうまくよりそなく那谷

さをしうれ妻行山のあちとまれかくみく月をうちてや時

鹿の紅葉

うたられくあるうしたの拾屋うたうこそ身ふかみ宮れ

閑居秋

うたそ人れ州のまれもか麓人立るうたるされうち

あるくは洞ちうへそ菓れ戸の森よ被をくしてこ

秋鳥

鹿の巣れ磯ちとあもちうたるしくうしくもえちのこ

[illegible]

花あるうしくれい

うふ蝶の羽秋を毛ようちうへ寺ちまふたうとれ笑ようち

秋燈

うやうちうあれ山大新いううとあ秋乃も秋を書ふくさん

鐘拝送秋

尾ふちるれくれれ未いくれうれ野ちれ鶴ちのちこのみしく

暮秋

小鷹人夕寒ちうる笹の葉れさやい野ち逢ちて秋をうしく

うち野ちまつちおうれ人秋ちう夕川の実ちれうちれうふあ蛍ちう野

寒ちやうち毛受の耳原秋あをてあうれをうれ路ちう陸

暮秋露

けのこゑとゝ[illegible]秋のくれまてこゑ[illegible]

暮秋時雨

くまてゆく秋の日影をしたふかな[illegible]

初冬

もゝちゝ[illegible]の[illegible]を[illegible]

[illegible]

[illegible]

時雨

神[illegible]月[illegible]

[illegible]時雨

[illegible]

古寺時雨

[illegible]

[illegible]

何[illegible]

[illegible]

落葉

[illegible]

水邊落葉

[illegible]

曉落葉

[illegible]

夕紅葉

入[illegible]

閑居落葉

苔のしたもしらくもるもみちふかれる人のあとも絶しを

紅葉殘枝

ちる葉かそ先こしてもちを残す樵夫の斧

冬月奇の月

夕風のとこえてもちる葉を立てこそ高きれ

殘菊

色も香も移まこはまさらて霜枯しや霜をもとられて

さこあの紀州面の宇やこうん多葉もうつろひすけも

瓶裏殘葉

はかまもる夕月新はまをれても残る葉の寒枯ふ枯ね

霜

一むら残仲の葉にあらはく霜を書る宮ハ志こそあらり

あとも枯さはこそ野辺の板橋ふしめをり

寒艸

沈ゆ原ふ生て後面ま安ふらぬ霜のこれをとめ山かふ

面豆のあくあるれ生のこれもうね野の薄霜れ枯ふり

寒樹

枝を深て野辺小面そる松ふ霜やとこぬ風の寒ふ

木枯

あら無ハゆくこ山ふ枝ふ枯ふ山のこ枯ふ

氷

風落の梅の枝をふ枯ふ氷をりやふ井の水

底ふこく枝のこ面ふ枯ふ葉ふ下ふ枯ふ

山寒冬月

もみち葉はちりにし後は梢しくれ残る八月よりさひしく神さひにけり

雪ふるこゝろあはれいつとおくれてもこの山に月をみるかな

閑庭霰

ちりはてし木の葉のうへにあられふりて跡なき庭の世をも何とへん

衾

きつねなく木の下の庵のうへにけさは風さえて衾かさねん

網代

むらむらとみたれよる聲も宵はまたひをむすひとり河なかれとや

千鳥

霜まよふ新防人の袖のうへにゆふさむこゝろてなく嶋かな

月おちる曉浪にきくまてあとをしらくしもくらしと思ふらん

夕月夜むかしやめくる廣澤の川原ちかしとやとる霜夜かな

立さわく波のよるさへ見えてあやしく城外をくまるゝねそふらん

もみち葉のとまりもあらぬ河浪にまよひてゆくる峰なかり

霞

遊くやまさかあらはれのあたの浦かけれとさくれのうちかくらめぬ

雪

あし春からの浦の聲もおもしろくゆきしくは雪山にくるまて

挟らためてし枕の山は庭にて袖の袂を見てしらる白雪

秋くもやよう山の峯にしはかつらくもふるとし白雪

雪ははる木の葉のまとひしけれとんのおとをいくぬ日はなし

あしかりの子をおもふ空もやとらし松より落るはの白雪

衣うつ音のふそくとわかつさやし里をはらふる遊さにけ

加科さきし松よりかゝるの一むらハ雪よとさゝぬ夜ミつまもなし

雪おもしろく人のもとへ

高山の雪見おもしろき岩屋にハ君まちつ酒もあつくしてのまく

松上雪

よせくる浪もさえても清き白波の濱松の枝に雪ハ高砂かな

半天楼にさかひて雪見れは時の中に雪晴

竹の葉に雪ハことさらに積もれぬとも思ふてふ枝に夜白き松

高き山よりも見るやうして

袖のへ泥をとめや小豆に落る雪ハさらに寒さに節分青そ消る

寒鷹

散る雪の寒さ雪のうち洲にも鷹ハたれを思ふへきもしつゝ

夕されハ三日月松にかゝりしに田沢らの鷹ハ帰そしらさる

浅くら岡のむつらの上葉に雪散てかたはらしく野分にかゝる

いつまでの野さとよふ風雪にかたき松の雪ハ穴にも落ちしとの色

鷹狩

とりも得ることに野辺にちるゝ浅茅原あらん穴にも志め鳴かけし哉

御狩場にかゝりてさらし鷹かれハ鈴のをとききに雪そちりくる

埋火

ことるやうの訓の琴とこきれつる桐の火桶ようとくあまりまれ

ことハぬ木までつくれる火桶さるにあられとおもふ住まゝ影哉

爐火

山の者におもるに夜もすからつゝしむりさしまへて霜夜あかさん

爐邊似春

ひとへの中あつやこの人の湯も青にも春をたのしむる夜のうち哉

埋火

[illegible]

神樂

[illegible]

大原や[illegible]

早梅

[illegible]

冬鳥

霜[illegible]

垣[illegible]

小[illegible]

[illegible]

冬花

[illegible]

[illegible]

待花

[illegible]

雪中菜花

世の中を雪と[illegible]

歳暮

雪を[illegible]

[illegible]

忘れ草

稲妻のひかりの原の夢さめて青葉をむすぶ秋の夜の月

節ごとにうきをかさねて立つるかな梅の古枝に春を待ちつる

うき節の数をしるべにたどるかな玉川上の流れ長き

玉川のあさきふかきを問ふ人に答へてしんの八重山吹

施設山霞のうへの奇ふかきを問ふ人に答へて

ひとくさの新葉にさきまじりいまをかぎりの花のをうつ

いまやまさいにしるふかきなくさ仏法ふかきをよやとめん

顕恋

うれくらぶ雲にまがれる出づる絶えぬ

槙ちらたつるもまちてまちてやと絶えぬ人のひとを告げん

尋恋

あつねりもまちまちふ恋ゆゑ人の命をかけてをつるかな

逢恋

夏神のあさ霧の濱の玉砂子八百万年をくちなしの恋

夜草枕ひとり濱の濱ゆゑ波の白玉契をうたをかたらへ

宇良ふれぬ中に新の浦ゆゑ神やあらぬ恋

別恋

あふさ人一夜をうつれおもふ心波の中ゆく衣笠

幼恋

おもひそめ契をしたへ若草に新ひとつ根をうつる

等思兩人

ふたり人てをかふさふふ新をんなをへ角てれ乃芝ゆゑ

おもひそめをもあらそへる二上てをあるをやなる新をん

寄松恋

くちまもる片山岸の姫小松ちりてそむすひし枝のちぎりを

はよわしく出こころ見おくりて花松その松は秋風ぞ吹く

寄霧恋

高角の山の山霧あらはれ跡まつのふる袖もうちしめりゆく

寄鳥恋

時をさへ思ひあかれ契もしらぬ身はまたもの都の野のまよひの鳥の夢も絶

寄竹恋

あらし吹くまたなる竹のおきまもあへかり夜床はふしへくまつ

もちもちくらたくねは若竹の雫や袖の雫をのさらねん

春恋

梅もいさ桜もまたしほるくとおもふ人は八つの花その人をうらみし

契おもし花の時もふる雨のうれはしにほとは袖やくくちゆく年

若き瀬の雨ぎをあまれる花雨を我まちの人をし髪よおもひよせつて

人もしきものおもひのつゆの花もなく胡蝶もなつかしきの時

やまふきの花まつ花のほとくを花雨きて出る人よははらきんをそ人し

夏恋

夜川の玉藻の猫の波しほるるのつゆやとしてしの秘

うきうときことしの夜の推のもとはさ床妹ららつのまつの

もとき鹿霧のほるかひの袖の志けきにおもひの雨そのまちの宿

秋恋

あうきの一夜のまの恋しさよ月の人さきいもわくまはく秋

ふさの袖は志かしもまちらあの青の雛さ雨もさうせは

朝月夜のへるはの今の声もかぎみし野端も秋風やふく

冬戀

小野山のくもゐにかゝるかなしさを人も社しる

逢不逢恋

さらぬ人も秋の夜をむすびあるかなしさうへさん

寄艸恋

あしこふれてそなのおもとおもふとも人もこゝろはやそなふれそ

そうるもくもものいふ事のもさきを残おもひめくらす朝ゐるふ

第文のなかの引てそうへこゝろ行てやうる身中ものくらしけ

寄月恋

枕ゐふうるこゝろ者ゐまとのはらやうこゝ行てをうをてゐ月

戀の哥ゐ中

くゝ行ゐてこゝふそく契をたうゐをまゐ浦よもむくゝ緒の者うれ

そこふうくゝ者の引ゐ行をゐ落船のそやくゝも人をくゝれうるこゝふ

まらゐ浦のくゝ中ゐ湯をくらゐまゐ人うゐのうつゝまゝうハ

おもうををう紀身ゐをゐ者ゐ緒の絶ゐ爰やゐうゐむをゐん

身ゐれゐ行くゝ人ゐくゝむゐをれゐらそふつゐまゐてやゐゐや

今ゐをてをくゝうゐ和のゐふゝ出ゐやゐをれゐやをれゐ

白雪のゐをゐ行ゐをゐ立ゐ中ゐ社宮又ゐをゐを行ん

なゐをゐかくゐをゐゐゐ中ゐんあやゐ者ゐよゐのゐをゐハ人ゐおをゐ

ゐくゐ風のゐゐゐうゐくゐ成ゐくゐゐ行ゐ扇のゐゐをゐしゐ

むゐをゐをゐおゐゐわゐふゐのゐをゐゐゐゐ狂ゐ秋風ハ吹世ゐゐ者

ゐゐのゐゐゐゐゐ風ゐゐゐゐゐゐ未ゐゐゐゐ人ゐをゐゐゐ

ゐ為ゐ行ゐ片ゐゐをゐんゐゐゐの海人のゐをゐふゐゐゐゐゐゐて

水ゐる波ゐゐゐくゐ朝ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

[illegible]

沖津風吹まさる夕波のたちかへらるる袖の涙

あまさかるくらはしの川を渡りてもかの岸のうられてそ思ふ

なわしろかきうゑかへて山川のそこにかくれて人かとそ思ふ

あひそめてはつるあしのまくらもとわるる波こそ山もとろかれ

はつかしの笹をつかねて大ちうとなる身や猶ものうん

もしおもひの笹をつかねて枕やそこ見

新しきく海とあまとう一野なゆきくるもたつる身をうら

世をうらし人もうらし人もうらし大ふ世をも人もわそやこ身ん

つらしてふこもきみ人をれやもしきそのこそ恋をうらしつる

寄木恋

いとそてんあひふと人の身をめふらあるひの名をこそあれ

寄名所恋

うしまつ独もおくそひこうふこうふ

恋愛

うらこそ波めをもそ愛をもたんうつもしをと雨乃帯を

初恋

いとおもてもこそ一ふるあをとうをもふ

きつをとてるこそ独やきりたんしをふの神あをとうの

こうふう死接ふ一をもはもをもをこあるおをを

寄山恋

世の中をあを強てそのをおりをもふをもをこうこ

過門不入恋

はつかしのこをふこうを夕風一筆をもてをふをもをく

[illegible]

旅戀

[illegible]

寄艸戀

[illegible]

恋せん人

[illegible]

寄火戀

[illegible]

偽戀

[illegible]

寄風戀

[illegible]

初逢戀

[illegible]

切戀

[illegible]

後朝戀

[illegible]

寄笛戀

[illegible]

寄書戀

[illegible]

寄花恋

みそぎとてかけてもなれし人なつとたつ神とはらうとしやは

来不留

塩竈のうらさびてとは人のいそくうかはたてつゝ紀者をたゝなはやは

寄衣

池殿のたくはたつるやまあやをたゝめる衣のうらとあやをく